

故藤本浩之輔教授をしのんで

片岡 徳雄 (広島経済大学)

私たち日本子ども社会学会が平成6年6月11日、京都大学教育学部で創立第1回大会を持つことができたのは、準備委員長・藤本浩之輔先生のお力によるところが大きい。その生みの親の先生が亡くなられた。平成7年10月29日、私たち学会は深い悲しみに包まれた。

とりわけ私は、藤本先生とは縁が深かった。2人は、出身大学こそ違い、同じ教育社会学の中でも幼児・児童の生活に関心を持ち、共に初職は大阪府教育研究所(現大阪府科学教育センター)で、所属したチームは「マスコミュニケーションの児童・生徒に与える影響」班である。チーフの宇野登先生と私たちの3人は、それは愉快に仕事を進めた。いや、仕事を進めたというよりは、練達の宇野先生から若い私たちが公私、巨細にご指導を受けた、というべきであった。期間こそ短かったが共に学んだ「宇野教室」の、2人は同窓生だった。

あの頃から、藤本先生の仕事ぶりは緻密、繊細この上なかった。1つ1つのTV番組を子どもは視聴して、具体的にどんな刺激を受け、感想をもつかを見極めようとされ、簡単に十把ひとからげにすることを峻拒され、1つ1つのデータを撫で愛でる趣があった。晩年うちこまれた「子どもの遊びの聞き取り調査」を共にされた教え子の方から聞いた。「先生は、現地の大人や子どもと同じ目線で聞き、常に笑顔で『受け』の聞き役に徹せられ、どんなに疲れた1日でもその夜、必ずフィールドノートを整理された」と。あの頃がそうだった。私はその片鱗をまざまざと見ている。

先生の文章は天性のものであった。宇野先生のお口ききで、毎日新聞に「子ども論」を3人で代わる代わる書くことがあった。後にこれは『子どもの世界』(三一書房)としてまとまったが先生のはまことに素直で、のびやかで、達意の文章であった。後年よく色紙に書かれたと聞く「生きた言葉を語る、自分の言葉で語る」は、先生のモットーである。と同時にそれは、難解で仰々しいが空虚で現実味のない多くの教育論に対する、ひそかな批判でもあったろう。

研究の独創性については、多くの人の知る所である。先生の創始された「子ども自身の創る文化」というテーマは、言ってみればまことに簡単だが、誰もが着想しえない、着想しえたとしても学問研究レベルに上げえない、先生ならではのものである。若い頃から言われていた「子ども民俗学」や「柳田国男ばりの子ども研究」を見事に一貫され『子どもの遊び空間』『聞き書き・明治の子どもの遊びと暮らし』『草花あそび事典』『野外あそび事典』などは、「子どもたち自らが環境や素材に働きかけて創る文化」を立証するものであり、後生に長く残るお仕事と思う。

しかし、先生の示された業績は、1つの固有の領域を開拓されたというに留まらない。その手法と視点において、教育学や社会学の研究・実践に携わる人々に、広くかかわる深い教えがある。第1に、統計や数字にとらわれない社会学や文化人類学の手法の再確認である。

最近では、統計では語りえない問題を学問研究の対象にすること、を忌避する向きがある。若い研究者においてとくにそうだ。観察や聞き書きなど「目、耳、足」を大事にする科学の基本姿勢を、もう一度、先生の研究から学ぶべきではないか。第2に、子どもの明るい面、積極面に着目されたユニークさである。たしかに今、日本の子どもの状況は暗く、病的でさえあり、そこに着目する必要は十分にある。しかし、子ども本来の潜在的可能性を掘り下げなくては、子どもの未来は開けない。このためにこそ、先生は子ども自身の明るい創造性を過去の歴史に立証された。それだけではない。実際にも「子どもの冒険学校」「あそびと仕事の村」などを主催され、今の子ども文化の育成モデルを示された。

このように、縦横のご活躍だった先生が還暦の年に大病され、しかしすぐ回復されたというお便りをいただいて、それからしばらく経った、たしか平成5年6月12日。「子ども社会学」にからむ学会を創ろうというお電話である。実はこの話は、ずっと前から2人の間でくすぶっていたもので、どちらかと言えば先生の方が慎重だった。それがこれをきっかけに、多くの方々のご賛同に広がり、学会誕生にまで一気に突き進むことになった。

しかし、私は今にして思う。先生がこの学会に懸けられた思いがどんなに大きかったかを。もちろんそれまでとて、十二分のことをなさってこられた先生ではあるが、この学会によって様々な学問領域の方々と新しく手を結び、子どもの社会と文化の研究・育成にさらなる拡充を期す——そういうお気持ちがあったらろうことを察するとき、先生の残された大きな業績に学びつつ、私たちは共にいっそう手をたずさえて進んで行かねばならぬと思う。

最後に、先生の作詞「白い自転車」(作曲は先生の教え子のお一人)を記載し、心からご冥福をお祈りしたい。

白い自転車 詞 藤本浩之輔
曲 鶴野祐介

こどもがのえた ほらっばに しろいじてんしゃたひとつ
 じこの下ッれが わすれたか やどなしこいぬもふしぎそう
 すすきそよそよ ほらっばに エンマコオロギ なきでした
 そらにはあまるい おつきさま しろいじてんしゃ まだひとつ
 しろいじてんしゃ まだひとつ

「
白い自転車」
藤本 浩之輔

一、
こどもが帰った原っぱに
白い自転車 たひとつ
じこの誰がそんれたか

宿り仔入も不思議そう

二、
すすきそよそよ原っぱに
エンマコオロギ 鳴き出した
そらにはあまるい おつきさま
白い自転車 たひとつ